

2月上旬に表参道ヒルズがオープンして話題を呼んでいます。3月5日の朝、友人達と9時の特急を乗り継いで原宿駅へ着いたのは11時頃でした。駅から表参道ヒルズへ向かって大きな人の流れが続いていましたので、私達もその流れにのって歩き始めました。

原宿側から見た表参道は思ったより高低差の大きい坂道でしたので、人の流れがよく見渡せました。まさに蟻の大群が大行列を作って大移動する様な人・人・人で参道は埋まっておりました。

お目当ての「表参道ヒルズ」は坂の中心部にあって地上6階、地下6階（延床面積3万4千㎡）は、世界のトップブランドを集めたビルでした。上下するエスカレーター、エレベーター、広い歩道が組み合わさられていて、人の移動する様は蜜（ブランド店）に群がる働き蜂の動きを思わせる喧騒をきわめたものでありました。

この設計に携わった関西の世界的建築家安藤忠雄氏は、「何処の街でも美しく魅力的なところはたくさんあります。市民が自分達の住む街をもう一度見直して、ここでしか出来ない街づくりをすることです。特にその土地に育てられた文化を都市づくりの中心にすべきです。」とっております。

原宿までの電車の中で隣り合わせた上品な老夫婦が「私達も田舎から若者の街を見学にやってきました。私達の田舎の角館は美しい街です。是非おいで下さい」と。そして美しい手書きの絵葉書を何枚か頂きました。都会と田舎の良さ、美しさ、喧騒と静寂との格差の魅力を教えられた思いでした。

安藤忠雄氏の描いた①大型ビル「表参道ヒルズ」は人々を一網打尽に取り込むのではなく、大量の人の群を回遊させ表参道界隈を共存共栄させると言う大阪（商）人らしい関東には無い素晴らしい発想と私は思いました。②六本木ヒルズの中心をつき抜けるメインストリート「けやき坂通り」は、名物である大欖は今はずっかり葉を落として煙害のせいか幹を黒々とさせておりコンクリート舗道でしたが、その舗道を歩く私達を和ませてくれたものは舗道に沿って流れる幅50cm深さ5cm位の小さな水の流れでした。ちょうど窓ガラスを流れ落ちて行く様な清涼感でした。夏は緑の大欖が影を落として歩く人々に安らぎを与えてくれることだろうと思いつつ、この豪華なブランド街で買ったものはホワイトデー用のハンカチ、スカーフ、小物でした。それも田舎なら半額で買えるかもとの思いがありました。地方における商売のあり方を考えながら帰りの電車で読んだ日経ビジネスに、イトーヨーカドーCEO 鈴木敏文氏が「これからは御用聞き時代です」とありました。